



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 387号 2011.5.23 発行 社会政策研究所

朝日新聞の連載「生老病死 第2部 終の住処」をまとめてお届けします。【kobi】

妻の夢追いシニア村

朝日新聞 2011年5月18日
「シニア村」の外観。手前の円形の建物が食堂＝龍ヶ崎市松ヶ丘2丁目

開発業者の手を借りず、住み手が資金を持ち寄ってつくる共同住宅。コーポラティブ方式と呼ばれる、この方式で建てた日本初の熟年世代のためのマンション「龍ヶ崎シニア村」が龍ヶ崎市に産声を上げて4年。入居希望者が相次ぎ、今春、2棟目が着工した。「現代版長屋」の終（つい）の住処（すみか）に、なぜこれほどの高い関心が集まるのか。

話は、今から41年前にさかのぼる。

ソフィア・ローレン主演のイタリア映画「ひまわり」のポスターが街角を彩り、レコード店からは由紀さおりの「手紙」が流れていた昭和45（1970）年の東京・吉祥寺。

「シニア村」の代表を務める今美（いま・み）利隆さん（60）は、龍ヶ崎一高を卒業し、慶大法学部に通う1年生だった。同い年の妻、久美子さんは杉並区の実家の洋裁店を継ぐため、吉祥寺の喫茶店でウエートレスをしながら当時の杉野ドレスメーカー女学院で学んでいた。

利隆さんは、叔母が切り盛りする吉祥寺の下宿に暮らし、久美子さんが勤める喫茶店に足しげく通った。1年後、久美子さんと手紙を交わす仲となり、28歳で結ばれた。

利隆さんは、東芝の広告宣伝担当の社員だった。「仕事一筋の人。あのころの男の世界では、ごく当たり前のことで、夜11時に帰ってくると、どうして今夜はこんなに早いのか、って言うてました」。久美子さんは、当時の利隆さんの暮らしぶりを振り返る。

テレビアニメ「サザエさん」や東芝日曜劇場、企業の協賛で海外からアーティストを招く冠コンサートなど、利隆さんは時間が不規則な業界との渉外にも追われた。38歳で長女が誕生したとき、子育ては久美子さんにまかせきりだった。

だが、バブル崩壊後、家電をはじめ多くの企業がリストラに乗り出した。まっ先に削られるのは、宣伝費だった。東芝が、全国25カ所に構えていたショールームは本社を除き、すべて閉鎖された。

ショールームの統括責任者だった利隆さんは、子会社のスタッフから希望退職を募った。本人はというと、本社で次のポジションが約束されていた。

だが、1年間続いたリストラ業務に、「気持ちが落ち込んだ」。3年後、自らも51歳で希望退職した。

退職の理由は、そればかりではなかった。仲間のリストラに明け暮れていたころの休日、



まだ小学生だった長女を、自宅を構えていた千葉県我孫子市から利根川を越え、取手市の公営プールに連れていった。そこで、地域の人たちのために仕事をする職員やスタッフの姿を目にして、「地元根づいた暮らしこそ、本来の生活なのではないかと思った」。

久美子さんの母は、くも膜下出血の後遺症で左半身不随の不自由な暮らしを長年続け、利隆さんがリストラ業務を終えたころ、78歳で亡くなった。80代だった利隆さんの両親も当時、心臓病や骨折で入退院を繰り返していた。

平日は久美子さんが我孫子から龍ヶ崎まで、電車やバスを乗り継いで通い、義父母の身の回りの世話をし続けた。

「子育て、両親の世話、自分たちの老後の暮らしへの備え。このままの生活を続けると、私たちが先につぶれてしまう」

そこで、久美子さんが、こんな夢物語を利隆さんに語り始めた。

「普通のマンションと老人ホームが合体したような住まいがあれば、みんな一緒に安心して暮らせるのに」

利隆さんは退職願をしたため、「今思えば無謀ともいえる妻の夢」を追い始めた。(佐藤彰)

初の試み 賛同者次々

朝日新聞 2011年5月19日

屋上に広がる菜園と盆栽が並ぶ庭園＝龍ヶ崎市松ヶ丘2丁目

「普通のマンションと老人ホームが合体したような住まいがあればいいのに」

専業主婦だった今美久美子さん(60)の夢は、「地域に根づいた暮らし」を求め始めた夫利隆さん(60)の琴線に触れた。

一方で、「マンションの建設なんて、素人にはどこから手をつけてよいものか、皆目見当もつかなかった」。利隆さんの「決意」は、夢と現実の狭間(はざ・ま)に揺れ続けた。

とりあえず、東芝を希望退職する直前からマンション管理の勉強を始め、退職後は宅建業の本を買って熟読した。

自宅のある千葉県我孫子や松戸市、都内で催されるコミュニティーやビジネス関係の講習会にも足しげく通った。仙台市などに建つシニア向けマンションも夫妻で見学した。だが、老人ホームのような機能を備えたマンションは、全国のどこにもなかった。

さらに、億単位の建設費の捻出にも頭を抱えた。

「銀行が、担保も実績もない、しかも素人に貸してくれる額ではないですからね」

そこで、不動産関係者からアドバイスされたのが、住まいを構えたい人たちがお金を出し合い、各部屋を自由に設計して建設するコーポラティブ方式のマンションだった。

利隆さんは、この方式を広めるNPO法人を訪ねた。法人のスタッフは「ぜひ先駆者になってやってみてください」と促した。

だが、「物事に何かと慎重なシニア世代が、新しい方式に、しかも何十人もが賛同してくれるのか、不安だった」。それでも、第二の人生のため、「走り出した」。

まず、賛同者を集めるため、ホームページ(HP)を立ち上げた。シニア世代が閲覧するほかのHPにも書き込みをした。学生時代の友人で、大手ビール会社の広報室長にも相談した。友人は「HPだけではパワー不足。ニュース性があるようだから、マスコミの力を借りてみたら」と助言した。

半信半疑だった。

だが、新聞、雑誌の各社に情報を提供したところ、朝日新聞柏支局の記者が取材に訪れた。2005年5月26日付の千葉版に掲載された記事のタイトルは「老後の住まい共同設計 シニア村 住人募集」。

この記事を見た柏と千葉市内の3組の夫妻が、共同設計の話に「共鳴」した。



「夢を実現する可能性がにわかに膨らんだ」

計画は、今美さん夫妻ら4組が「核」となって動き出した。やがて、数県にまたがるブック紙やテレビ局も取り上げ、賛同者が膨らみ、最終的に計29組の出資者が県内外から集まった。

「需要は全国にあったんだ」

06年、日本初のコーポラティブ方式のシニア向けマンション、龍ヶ崎シニア村の工事が始まった。

「シニア村のお手本は、サザエさんのようなご近所関係。母フネさんが、垣根越して伊佐坂先生の奥さんとおしゃべりするような、ほどよい距離でおつき合いし、助け合い、見守り合う。そんなご近所関係です」

利隆さんは、高齢者や障害者が集うマンションを「現代版長屋」と位置づける。

「人は年を重ねると、体が衰え、暮らしに不安を覚えます。衰えたところを素直に受けとめ、公共の制度やシニア村のサポート態勢を活用しながら補えば、普通の生活を続けることができる」

当初、抱いていた心の迷いは、徐々に確信に変わった。その確信は、3年余りにわたるシニア村の暮らしを経てさらに深まった。(佐藤彰)

50～80代、見守り合う

朝日新聞 2011年5月20日

車いすの生活に配慮した居室で絵を楽しむ阿藤保男さん＝龍ヶ崎市松ヶ丘2丁目

龍ヶ崎シニア村の代名詞は「中高一貫住宅」。50代から80代までの29世帯、40人がマンションという「一つ屋根」の下、それぞれの生活を営んでいる。半数近くは、女性の単身世帯だ。

建設の仕掛け人となった専業主婦の今美久美子さん(60)は、住民たちの暮らしぶりを、十人十色ならぬ「40人40色」となぞらえる。

住む人たち一人一人の要望を設計士が聞き、それぞれのニーズを踏まえて各部屋をしつらえる。

岐阜県から引っ越してきた阿藤保男さん(58)夫妻は5年前、旅先で巡り合い、やがて結婚の約束を交わした。だが、保男さんは身体障害者の療養施設、婚約者は自宅と、生活環境は別々。一緒に暮らせる住まいを求めていたところ、地元新聞の記事でシニア村の取り組みを知ったという。

保男さんは23年前、大工の仕事中にトラックの荷台から足を踏み外し、荷崩れした丸太で頸椎(けい・つい)を傷めた。意識を失い、2カ月後に病床で目を覚ましたとき、首から下が動かないことを知った。「当時は心の置き場がなく、死にたいとさえ思った」

翌年、口に絵筆をくわえて詩画を描く星野富弘さんの作品と出会った。保男さんはリハビリを兼ね、不自由な手で絵を描き始めた。絵は、作品展を開くほどまで上達し、心の拠(よりどころ)となって久しい。一方、「シニア村は、施設にいた自分を社会へ出るきっかけをつくってくれた」。

新居のドアは、マンション仕様の開き戸をやめて、自動ドアにもなる引き戸にした。玄関口にも、外から帰宅するとまっ先に車いすを洗えるように水道を付けた。風呂は、体が不自由な人でも楽に入れる「機械浴槽」。和室の畳も高くし、車いすからスムーズに移動できるように仕立てた。

「やっとこの地で、2人で暮らせるようになった」

越してきて間もなく、シニア村の代表が立ち会って龍ヶ崎市役所に婚姻届を提出したという。

難病の疑いがあり、「将来、車いすを使うようになったときのために」と、先々を見越し



て移り住んできた人もいる。

「亡き夫の仏壇を置ける設計に」「愛着のある家具をはめ込められる造りに」「ペットがいるため、壁の下側は板壁に」。一軒家の感覚で仕上げたそれぞれの部屋には、それぞれの暮らしが宿る。

全体は、コンクリート打ちっ放しのモダンな造りの4階建て。正面玄関を入ると、左手にはグランドピアノ。その奥が、円形のしゃれた造りの食堂だ。

日が傾くと、12～13世帯の住民たちが三々五々、食堂にやって来る。その日、部屋のキッチンで調理をしない人のために1食840円の日替わり料理がテーブルに並ぶ。

屋上には、500平方メートル余りの菜園もしつらえた。土の深さは30センチほど。当初は庭園として開放した。ただ、今はほとんどが畑に。春菊、ダイコン、ハーブ、ナス、トマト、インゲン、スイカ、キャベツ、イチゴなど、四季の恵みが育ち、食卓を彩る。

近くには総合病院やスポーツ施設、公園がある。スーパーや駅、銀行、病院などを巡る無料運転サービスや、常駐スタッフによる緊急時の24時間対応システム、歯科の定期訪問診療など、安心して暮らせる環境と態勢が整う。

風邪をひいた住民がいれば、仲間の住民が容体をうかがい、必要なものを買ってきたり、スタッフに伝えて病院間を送迎したり。

久美子さんは「住民たちがごく自然に、何げなく見守り合う関係を築きあげてくれた。これが、われわれの世代にふさわしいシニア村のコミュニティーなんだと思います」。

だが、最初から良いことばかりが続いていたわけではなかった。反省点も、課題も、そして、大きな誤算もあった。(佐藤彰)

介護視野に新棟計画

朝日新聞 2011年5月21日
歯科医の定期訪問診療＝龍ヶ崎市松ヶ丘2丁目

大きな誤算もあった。

龍ヶ崎シニア村は当初、クリニックも開設する段取りだった。が、診療と駐車スペースが十分にとれない、などの理由からかなわなかった。このため、二つの医院と交渉して往診できる態勢を整えた。

幸い、まだ往診を希望する入居者はいないが、2棟目のシニア村には、クリニックを開設する方向で関係者と折衝している。

歯がゆい問題も出てきた。1棟目に入居した29世帯のうち3世帯が、個人的な事情からシニア村を後にした。

1世帯の居室には、すぐに新しい仲間が移り住んだが、2世帯分の空室は不動産業者を介して売りに出されているため、「世間にあまり知られていない」という自由設計のシニアマンションの良さを買い手に十分伝えられず、昨年暮れから空室の状態が続いている。

シニア村代表の今美利隆さん(60)は「造ることばかり考えて、売ることまでは頭が回らなかった」。このため、不動産業者の登録も検討し始めている。

全入居者でつくり、マンションの運営やかじ取りを担う管理組合の役員の負担も意外と大きいということがわかった。

話し合いの結果、2棟目では、マンション法(区分所有法)に触れない範囲で総会や理事会、食堂管理などの負担を減らすため、シニア向けのルールづくりに取り組むことになった。

「みなさん、のんびりと暮らしたいと思っていますから」

もう一つは、人生90年といわれる「在宅介護」への対応だ。今のシニア世代は親の世話はしても、子どもの世話にはなりたくないと思っている人が少なくない。親を世話する「縦の介護」から、妻が夫を、夫が妻を世話する「横の介護」の時代が迫っている。

妻久美子さん(60)はこれまで、複数の入居者の介護申請を個人的に手伝ったり、ケ



アマネジャーやデイサービスを紹介したりしてきた。

だが、「ケアプランの中身にまでは、資格のない素人が立ち入ることはできない」。

5年先、10年先には75歳以上の後期高齢者が増え、病気や介護の件数が増えてくるという。このため、2棟目には、新機軸の「生活の相談員」を常駐させ、介護保険の申請を代行したり、通院に付き添って毎日飲む薬を管理したりする仕組みも整えたいという。

シニア村の基本方針は「在宅介護」。だが、入居者の中には「夫婦がともに介護が必要になったらどうしよう」といった不安を抱えている人も少なくない。

2棟目では、在宅介護が立ちいなくなってきたときのため、食事や排泄（はい・せつ）、入浴などのサービスが受けられる要介護の人たちのための特定施設「適合高齢者専用賃貸住宅」も併設する計画だ。

利隆さんの母は介護老人保健施設に入っていた。「入所当初はつまらなそうにしていたが、近所の親しい友人が入所すると、すっかり明るくなった」という。

「高齢になるほど友人や仲間が財産となる。終（つい）の住処（すみか）が変わっても、シニア村の顔なじみが立ち寄れる環境を整えたい」

あまたの反省点を踏まえ、2棟目の工事は4月から始まった。震災で建築資材の調達に不安は残るものの、完成予定は年末だ。一見、「順風満帆」に見える新棟建設だが、計画が浮上した当初、久美子さんは2棟目の建設に猛反対し、夫婦げんかが絶えなかったという。

さらに、計画が動き出した矢先、予想だにできなかった壁も立ちはだかった。このため、利隆さんは1年半、「うつ病に近い状態におちいった」。(佐藤彰)

「医食住合体」が浸透



朝日新聞 2011年5月22日
シニア村の模型を前にした今美利隆さんと妻久美子さん＝龍ヶ崎市松ヶ丘2丁目

「2棟目を建てたいと思っている」

龍ヶ崎シニア村の1棟目への入居が一段落して間もない2008年春。代表の今美利隆さん（60）は、妻久美子さん（60）に話を切り出した。

「1棟目が軌道に乗っていないのに、2棟目の建設なんて早急すぎる。2棟追うもの1棟をも得ず」

久美子さんは、夫の計画に猛反対した。

夫婦の言い分は、平行線をたどったが、最終的には、久美子さんの方が折れた。「私は1棟目のことで手いっぱい。だから2棟目には一切、手を出しませんから」。そんな「条件」付きでの黙認だった。

1棟目の敷地は、利隆さんの亡父の所有地。今度は隣地の持ち主が、1棟目の「開村までの地道な歩み」を見て、「土地を手放してもいい」と申し出てきた。1棟目の実績から銀行の融資も受けることができた。

加えて、大手企業に勤める都内からの移住希望の男性が、ほかの出資希望者の「まとめ役」も務め、利隆さんと二人三脚で計画を推し進めた。だが、リーマン・ショックを機に、男性が勤める会社の経営が傾き、都内の自宅を売り払って移住するというプランが頓挫した。ほかの移住希望者も、自宅の売却額が軒並み下がるなどし、10組いた移住希望者は2、3組にまで激減した。

利隆さんは、都内のコンサルタント業者を訪ね回り、相談を重ねたが、名案は浮かばなかった。「膨大な借金が重くのしかかり、気持ちは落ち込んだ」

「主人って、こんなに弱い人間だったかしら」と当時、久美子さんは思ったという。「私の方がむしろ、デンと構えていました」

久美子さんは、1棟目を建てた地元の建設会社に相談した。県内外に幾つもの介護支援施設を建てていたこの会社は、取引のある介護支援団体と今美さん夫妻の橋渡し役を買っ

て出た。

これが功を奏し、介護支援団体が運営する「適合高齢者専用賃貸住宅」を併設する案がにわかに浮上した。並行して、入居世帯数を30から20に減らす新たな計画も立てた。

今美さん夫妻は以前から「いずれは介護付き住まいへの備えが必要になってくる」と、頭の片隅で思っていた。併設案は「渡りに船」だった。

再び出資者を募るため、これまで問い合わせのあった県内外の400人余りに案内文を送った。すると、3年前、夫に反対されて入居をあきらめていたという女性から「夫の体の具合が悪くなったので移り住みたい」と、入居の希望が寄せられた。都内のマンションに住むサラリーマンは、車いすを使うようになった妻が昼間一人で楽に安全に暮らせるようにと、入居を申し出た。

2棟目では、訪れた子どもや孫たちが泊まれるゲストルームも新設する。食事ができる1階のラウンジを地域の人たちにも開放し、入居者が指導する陶器の絵付け教室なども開く計画だ。一部6階建ての屋上には、入居者専用のラウンジを設ける。

国土交通省もお年寄りや障害者にやさしい「先導性のある住宅」と位置づけ、そのモデル事業として補助する。66平方メートルの居室の価格は約2700万円。毎月の管理、運営、修繕積立金は計6万円。

「デンマークでは、福祉は住宅に始まり、住宅に終わる、といわれている。この10年間で、新しい挑戦は決して順調には進まないということを私たちは学んだ。そのお陰で、医（介護）、食、住にコミュニティーが合体すれば、終（つい）の住処（すみか）になりうるという考えを少しずつだが、広めることができた」。夫妻は「村人たち」との歩みを、そう振り返る。

＝おわり（佐藤彰）

障害者を地域の人的「資源」に

朝日新聞 2011

年5月21日

綿貫好子さん（障害福祉サービス事業所所長—須坂市在住）



私が所長を務める「アトリエCOCO」は、2005年に長野市若穂保科の保育園の跡地にできた。約50人の知的障害者が、遊休農地を借りた野菜づくりやクリーニング、三つの公民館の清掃などを行っている。

若穂の人々は温かかった。相談した市議は、区の総会で住民に理解を求め、区長は「何でも言って下さい」と励ましてくれた。「よし、地域の中で厄介者でなく、障害者が『資源』となるような運営をし、コミュニティーの場にしよう」と思った。

住民が立ち寄ってくつろげるようにと、喫茶店を開き、障害者たちがコーヒーを出している。お花見会、花火大会、収穫祭など、地域に開放したイベントを行い、民生委員をはじめ、様々な市民ボランティアが助っ人として参加してくれる。

障害者たちはよく働く。地域でその姿を見てもらうことで、かわいそうな存在ではなく「地域の資源」と認められるようになっている。

今度は、障害者が地域にお返しする番だ。感謝の印として、屋代線の信濃川田駅に四季折々の花を植えたプランターを飾って駅構内の清掃を行ったり、地域の高齢者デイサービスで歌やダンスのボランティアを行ったりしている。

でも、偏見や差別意識が完全に消えたわけではない。

「我が家には子供が居る。年頃の娘が居る。だから困る」と言われたり、知的障害者が歩道橋から子供を落としたという事件が報道されて、グループホームに反対する声が出て断念したりしたこともあった。

人々の理解がもっと深まれば、彼らの仕事も就職先ももっと増え、彼らの生活の場も広がるはずだ。そのために、▽学校教育で障害者の人権に関する学習を積極的に行う▽自治体には障害者の福祉を担当する部署だけでなく、様々な部局の連携を深めることを求めた

い。

構内に一体ネコ何匹？ 市営地下鉄 踊場駅（横浜市泉区） 伝説にちなみデザインに

読売新聞 2011年5月22日



改札口に向かう地下のコンコースを進む。ふと壁を見ると、「猫」と目が合った。思わず足を止める。地名の由来ともされる「猫の踊場（おどりば）」伝説にちなみ、駅には猫のデザインがあちこちに施されている。地域に親しまれている「猫の駅」は、1999年の開業以来、住民の利便性も大きく向上させた。

「踊場」は駅周辺の昔からの通称で、住所名としては存在しない。横浜市交通局が編集した「高速鉄道建設史」（2004年発行）によると、「付近の猫が毎晩集まって化かし合ったり、踊り合ったりした場所」という伝承が由来。この伝承を取り入れて、駅に猫たちがデザインされた。

いったい何匹いるのだろうか。開業工事の現場監督を務めた元交通局職員の池内久さん（61）に案内してもらった。「朝晩のラッシュ時に急ぎ足で通り過ぎる人には、気付きにくい猫もいますよ」。さりげなく配され、案内表示もない。探し出すのは結構大変だ。

コンコースには、巨大な猫の両目が両端の壁に1対ずつ現れる。一つの目は60センチ四方のタイル16枚分の大きさで、高さ、幅とも2メートル40になる。これだけ大きいのに、猫と気付かない人は意外にいるという。

階段の手すりには黒い4匹と、4番出口のひさし部分に取り付けられた4匹は、目に入りやすい。階段踊り場の天井でも、スタンドグラス風に配した3匹が円になって踊っていた。

「外に出てみましょう」と誘った池内さんが、1番と3番出口の屋根を指さした。三角に突き出た明かり取りをよく見ると、猫の両耳の形になっている。教えてもらわなければ、気付かなかっただろう。

見つけたのは計15匹。まだどこかに隠れているのかもしれないが.....。

同市泉区役所が発行した「いずみ いまむかし～泉区小史～」は、別の伝承も紹介している。毎晩近所の猫が集まり、こっそり持ち出した飼い主の手拭いをかぶって踊ったという言い伝えで、ここでもやはり猫が登場する。

区内に住む郷土史家の宮本忠直さん（80）は、「踊場は峠にあり、かつては町外れの薄暗いさみしい場所だった。通り過ぎるのは気味悪く、妖怪じみた猫の話が多く残されたのでは」と推理する。

踊場地域は、86年に戸塚区から泉区が分離したのに伴い、2区にまたがることになった。

泉区側の中田踊場自治会会長の木立常夫さん（69）は、12年前の駅の誕生で、「東京や横浜方面への交通の便が格段に良くなった」と話す。鶴見区の自動車メーカーに通勤していた当時、JR戸塚駅に向かう道路は渋滞が激しく、路線バスを途中下車したことが何度もあったという。

自治会では約5年前に会の旗を作った際、駅の猫のデザインを取り入れた。今年作製する手拭いにも採用する予定だ。「猫の駅として親しみやすく、地域の知名度も上がった」。うれしそうに猫たちに感謝した。（小林直貴）

◆福祉活動の拠点にも

緑豊かな丘陵地の住宅街にある踊場駅。周囲はファミリーレストランや電器店などが並び、生活感あふれる環境だ。

横浜市は地下の同駅整備に合わせ、地上部に福祉活動の拠点「市踊場地域ケアプラザ」を建てた。駅開業と同じ年にオープン。福祉団体の活動支援などを担い、東日本大震災に伴う計画停電の際は、施設の一部を臨時休憩所として開放した。住民の生活を支えている。

併設された「いずみ福祉作業所 ゆう」では知的障害者14人が働く。喫茶店でコーヒ

一を運んだり、店内で販売する帽子やマフラーなどの織物を作ったりしている。「地域の皆さんの写真や絵を飾るミニギャラリーもあり、喜ばれている」と所長の伊藤誠さん(37)。作業所の紹介チラシや喫茶メニューにはもちろん、猫のイラストが描かれている。

【メモ】 横浜市営地下鉄ブルーラインは1999年8月、JR線と接続する戸塚(横浜市戸塚区)より西へ7.4キロの区間を延伸。踊場から湘南台(藤沢市)まで5駅が開業した。踊場駅の1日平均乗降客数は1万7933人(2009年度)。開業翌年、「関東の駅百選」に選ばれた。

JR大阪駅：北側、危ない横断 障害者、妊婦にきつい50段の階段…柵越え近道



毎日新聞 2011年5月21日
横断禁止場所を渡り歩道の柵を越える歩行者。左後方はJR大阪駅につながる階段=大阪市北区で21日午前、大西岳彦撮影(一部画像処理しています)

全面改装して今月、開業したばかりのJR大阪駅(大阪市北区)北側で、柵を乗り越えて横断禁止のバス進入路を渡る歩行者が相次ぎ、JR西日本が対策に頭を痛めている。買い物客が集まる家電量販店「ヨドバシカメラマルチメディア梅田」から同駅に向かうには、約50段もある階段を上るか地下街を通るしかないためだ。バリアフリー

の面でも苦情が出ており、対策を検討している。【亀田早苗】

現場周辺は、ヨドバシや場外馬券売り場の客などでごった返す。以前は、西側の横断歩道を渡ってそのまま駅1階中央コンコースに行くことができたが、開業後は横断歩道を渡った後、階段で駅2階にあるアトリウム広場に上がり、エスカレーターで下りる必要がある。バスターミナルへの進入路を横切れば近道になるため、横断防止の柵を越えて進入路や進入路に続く市道を横切る人が多い。

柵を越えて横断した大阪市の40代の主婦は、病院に母の見舞いに来たといい、「前は通れたのに。つい近道を通った」。京都市から買い物に来た30代の夫婦も横断し、妻は「妊娠9カ月で急な階段はきつい」と話す。ベビーカーを持ち上げて柵越えする夫婦の姿も見られた。JR西には障害者団体からバリアフリー化の要望も寄せられているという。

バスターミナルは開業前だが、今月22日から路線バス、6月1日からは高速バスが入るようになる。最も多い時間帯には1時間に約80本が集中し、交通トラブルも心配される。大阪府警曾根崎署は「付近は交通量が多く、新たに信号をつければ事故が多発するおそれがある。道路管理者には、柵を高くすることなどを指導している」と言う。

JR西によると、50段の階段は仮設で、現場のすぐ北で工事が進む「うめきた先行開発区域」(13年開業予定)との通路が完成すればエレベーターなども設置する予定だが、平面移動はできないまま。JR西の佐々木隆之社長は「よい方法を検討したい」としている。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行